
東方英雄伝

一覧流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方英雄伝

【Zコード】

N8223Y

【作者名】

一覚流

【あらすじ】

仮面ライダー・・・それは人々の笑顔と全ての生命を守る者・・・
。仮面ライダー・・・それは選ばれた「英雄」がなる正義の証・・・
。仮面ライダー・・・それは世界を破滅にも平和にも導ける力・・・
。・・・これは全く関係ない平凡な中学3年生が迷い込んだ世界の話である。;この話は「東方」、「仮面ライダー」、「その他アニメ」の二次創作です。;キャラ崩壊なんて振り切れる人のみご覧ください。;そしてこの話の主人公は中3とは思えないことをするかもしませんが;are you ok?;一覚流は

なろうの流れ星愚者様となろう以外のとある1人によつて構成されています。なので流れ星愚者様やその他1名様のブログ・ＨＰなどにも投稿されている可能性があります。転載が確認されましたら確認いたしますのでコメント等でご連絡ください。）

おれは東方が好きだ。仮面ライダーも好きだ。その他アニメも良く見ている

そして俺は一つ夢があった。それは幻想卿に入る・・・つまり「幻想入り」したい。と思つていた。

そんな綱渡りのように不安定な感情を持ちつつ学校の帰り。

蜩が風情良く鳴くのはもはや夏であつて夏ではないと思つ。「夏」と言つるのは油蝉が鬱陶しく鳴くのが夏と言つものだと俺は信じている。だが今日、俺は変なものを拾つた。

赤いリボン、普通の人から見れば「そんな物どこにでもある」と言われると思うが、

なぜか俺はその赤いリボンに興味と言つかなぜか惹かれるものがあつたからだ。

どつかで見たことがある。どつかで・・・考へてると自分の家に着いてしまつた。俺は玄関前の階段を上がらうと思つた。

しかしそれは叶わぬ俺は2段の階段から足を滑らせて見事に空中一回転。そのまま頭を地面に打ち付けた。

ひつして俺の意識は段々と遠のいていった・・・。

夢が覚めると、そこは雑木林だった。つてあれ?俺こんなところに居たっけ?それにあの夢は・・・?

つて！そんなことはどうでもいい！（？）「じゃあどうだつ……」んな雑木林おれは行つたことが……ハツ！？「の感じ、そしてこのノリ……まさか！夢の！」「幻・想・入・り」！

「幻想入りキタ――――――――ツツ！」

今までの俺の心の叫びは何なんだつたらうか。俺のこの時のテンションはMAXまで上がつた。

フワフワした丸い毛玉のようなものが目の前を通り過ぎていつた。ソレが俺の幻想入りの予想を確実なものにした。

そして俺はポケットから携帯電話を取り出した。そして東方、つまり幻想卿の地図を見つけ、それを見た

「えつと……ここから一番近い所は……香霖堂か……。やれやれ。」俺は『一番最初に会つのが男かよ……。』と思いつつ歩を進めた。

歩いてそう経たないうちに香霖堂についた。途中妙に殺氣や気持ち悪くなる森を通つたがそれ以外は特に無かつた。

俺は香霖堂のドアを2回ノックした。「すいませーん、誰か居ますかー」何かギャグ的なことやろうと思つたのは

俺とみんなの内緒である。すると扉を開けるとともに中から男がきた。その男こそが森近 霖之助であつた。

「・・・見ない顔だね・・・。」霖之助は見慣れないものを見るよつな目つきで俺を見ていた。

俺は今まで起きたことを事細かに霖之助に言つた。

彼は目を見開くように驚いていた。俺は信じてはもらえるだろ？か？とは思つてはいたが、

案外納得してくれたようだ。「なるほどそんな理由だったのか。」

と一人で納得するほどだからだ。

「では君もここに迷い込んだと言うわけか。」霖之助は続けて「

その手の問題は八雲 紫に今は聞いたほうが良い。」

俺は靈夢はどうしたと言つたがは霖之助は少し戸惑つた表情を見せて言つた。

「今、靈夢は僕の所はあるか魔理沙の所にも、博麗神社にも居ない。」そのとき俺は右手側にあつたアタッシュケースに

視線をそらして驚愕した「霖之助サン・・・。これは・・・。」

「ああそれはね、無縁塚に落ちていたんだ。」と霖之助はまるで山手線を全部暗記した子供のように話し始めた・・・。

無縁塚むえんづか魔法の森を抜け「再思の道さいしのみち」を進んだ先にある木々に囲まれた小さな行き止まりの空間にある無縁仏のための墓地。結界の綻びがある結界の交点になつていていため、冥界や三途の川とも繋がることがあり、また外の世界の物が落ちてくることも多い。妖怪桜である「紫の桜」があるのもここである。

とどつかのウイキペディアをそのまま言つたように話してくれた。

まあ俺はそんなことは知つていたが

俺が気になるのはそのアタッシュケースの中身だ。そのアタッシュケースに俺は見覚えがあつた。

たしかあれは・・・。何だけ?

「ああ、そういえば、僕にはこのアタッシュケースの開け方が分からんんだが、君は外の人間だろ?」

「霖之助サン、アタッシュケースには鍵があるんですよ・・・。」

とは言いつつも俺はそのアタッシュケースを開けようとした。するとなぜかいとも簡単に開いていった・・・。

。 何故かと悩む間も無く、俺の疑問と言つか引つかかりは確信に、そして驚愕になっていた。

「仮面・・・ライダー・・・・クウガ・・・」おれの喉に霖之助は急にハッとした表情になつた。

「そういえばもうひとつ変なものがあつた・・・・」霖之助の台詞も終わらずに俺に続く2人目の来店。

しかしどう見ても来店のご様子ではなかつた。

「あれはっ！」俺はこれから起きた事、いや、やる事がカツチリと決まつたように感じた。

仮面ライダークウガ第一話に出てきたクモ男、その怪人、もといグロンギはきっと俺たちを殺して
クウガのベルトを奪うつもりなのだろう。そう思った瞬間俺はとつさの行動に出た。

ベルトの入つたアタッショニケースを持つて店内を迅速に出た。
まあ当然グロンギも追つかけてくるのだが、そのまま俺は走つた。

追われるるのは分かつていても追いつかれるのも分かつていて、しかし俺は走り続けた。

「クソッ！」何故かは単純、開けた場所に行く為だ。こいつと戦う方法は一つしかない！

ふと開けた所に出た。俺は息を切らしてアタッショニケースからクウガのベルト、アーフルを着けて
戦うしかない。俺は決心をした。あのグロンギがこつちに来るの
が森を通つてくる。その間に
アーフルを着ける！俺はアーフルを腰に着けた。直後この世の物とは思えない痛みが俺を襲つた。

「がはあ・・・・・が・・・・・・・・」言葉にならない

痛みを耐え切つて俺は立ち上がつた。

直後俺の腕に白い糸、いや縄がつけられていた。

「！」驚く間も無くその縄に引っ張られて上空に飛ばされて地面に激突した。

そして痛がっている間にグロンギは歩を進めてくる。俺は思った【死ぬ・・・！このままじゃ、死ぬ！】すると体に少し力が宿つた気がした、動く！俺は迷わずグロンギ

に生涯のなかで渾身の拳を繰り出した！

「ググッ！？」グロンギは驚いたようじこいつを見た俺は気にせずそのまま蹴りかかった。

すると段々俺の身体に純白の鎧、仮面ライダークウガグローリングフォームになった！

正直勝てる見込みは少なかつた。しかし1%でも勝率があるなら俺は戦う！

とか誰かが言っていた。まあそのまま死ぬより少しでも生き残れるならそっちの方が良い。

そう思つただけだ。

「ああ！」俺はボクシングの物真似で鋭いショートアッパーを繰り出した。

「ググウ！？」グロンギは少し怯んだ様子だがダメージは少ない。だが俺はその隙を見逃さないよう

心掛けていた！まずは左ジャブを一発、その後ストレートを一発、いくらグローリングフォームだからと言つて、

少しは身体能力は上がっている筈、ならば…と思い、俺は思い切り地面を蹴つて飛び上がった。2mぐらいは飛ぶはず

と思つたが大体1mぐらいかな？

そのままグロンギの肩に踵落としを食らわせた！

「やつ・・・やつたか！？」俺は壮絶に立ち込める土煙を見ていた。

「倒してはいなくてもダメージはある筈だ！この隙に逃げたほうが良いな・・・」「俺は来た道を戻ろうとした

しかしその行動は叶わなかつた。右足首にグロンギが出した糸が付いていた

「！？」疑問に思う間も無く俺は地面に叩き付けられた。

「グハツ！」運が悪く俺は地面に顎を叩きつけられてしまつ。田眩がして吐きそうになる。

ヨロヨロと木を支えにして立ち上がるがグロンギの方が実戦経験は2枚も3枚も上手だつたのか

俺をグロンギが出した糸で木と俺を接着した。

『忘れてたツ！こいつクモのグロンギだつた！』俺は心の中で激しく後悔した。やばい。この状況は

かなりまずい。この考えをしている間にもグロンギは迫つてくる。そして俺の首に右手をかけた。

ヤバイ！と思つた瞬間。ガトリングの轟音と共にグロンギの右手が千切れとんだ。

「！？」俺はすかさずグロンギに右足で蹴り飛ばした。そのグロンギは状況を飲み込めていらない様子であった。慌てた様子で森の方に逃げていつた。

「待てツ・・・！」俺はグロンギを追いかけようとしたが願わなかつた。そのまま走れずにバタリと倒れた。

薄れゆく意識の中で俺はぼんやりと、しかし驚愕の事実を見た。

「仮面・・・ライダー・・・G 3 - X - - ?」俺の意識はそこで途絶えた。

田が覚めるとそこは香霖堂だつた。

「！？」身を乗り出すように起きると身体に走つたのは激痛であった。

「おや、もう田が覚めたのかい？」霖之助は水が入つたグラスを

持つてきた。

「あれ？俺は・・・？」俺は疑問に思つた。本当ならば俺をここに運んでくることは不可能だ。

何故ならば俺の行つた先は俺しか知らないはず。俺がいた所は俺とG3-Xとグロングしか知らないはず。

俺は恐る恐る聞いてみた。

「霖之助サン・・・もしかして助けてくれたのは・・・。アナタですか？」

霖之助サンは少し間をおく、と俺は思つたが案外速めにその答えを出した。

「ああ。僕だよ。あのG3-Xと言つのは便利だね。」といった。俺の疑念は確信に変わつた。

この幻想卿にライダー系のシステムの一部が流れ込んできていることを、

その時俺は知らなかつた。

この幻想卿に前例の無い「ライダーバトル」が始まつてしまつことを・・・。

回に続く？

次

俺はこの怪我をしたボロボロ（またの名をボドボドダードー！とも言つ）になつたこの身体を直してくれる人は居ないだろ？かと思つた。と霖之助に聞いた。俺はぶつちやけあの場所しかない。

と俺は踏んでいた。

「そうだね……。永遠亭かな……。」ああやつぱり。俺は結局こうなるのかよ……。

と思いつつ店内から出ようとしたが、霖之助はこう言つた。

「そりゃあ君に合うかは知らないけどさっきの『Gトレーラー』の中に一台変なものが在ったよ。」

「……？」俺は霖之助に言つまま無縁塚に落ちていたと言つていたGトレーラーの中に入った。少し青っぽい明かりが付いたトレーラーの中にあつたのは一台のバイクであった。

名前は……確か……トライチエイサーだつたよな……。

霖之助はトライチエイサーのタンク部分を軽く2回叩いて言つた。

「これを持つて行くと良いと僕は思つんだ。」俺はそういうわれた瞬間少し考えた。

以下心の葛藤（笑）

どうするよ俺！無免許でノーヘルだぜー！こには乗つたら絶対に事故る！

いや持てよここは幻想卿だ。法律の何もありはしないはず！それに俺は私有地でバギーに乗つたことがある！

（実話です）だから操作は大丈夫だ、問題ない。

いいや待て俺はまだ中学生だつ！こままでイカン！よし落ち着け。答えは一つだ……落ち着いて言つのだ……。

以上心の葛藤（0・002456秒間）

「じゃ貰います。」俺は葛藤を全てスルーしていった。それに続き「確かトライチエイサーのキーは特殊警棒じゃなかつたですか？」

と俺は言つた。

「ああ、これの事ね。」霖之助はサッとその特殊警棒を取り出した。

このとき内心『この人、ほんとに持つてゐるんかな』と思つたのはオジサンとみんなの秘密だぜ！

俺はハンドル部分に特殊警棒を差込み、スタンドを足でしまい、

クラッチを切り、アクセルを少し開け（この時、ギアはロー）ゆっくりクラッチをつなぐ

半クラッチ状態になつたところで、バイクが前進する。

バイ

ク初心者のためのライダー1年生講座参考

はずだつた！何故か一向に前進しない！と思つたら、暗号、といふよりトライチエイサーにはパスワードがあつて

それを入れないと動かないことに電撃のように気が付いた！

俺は焦りながら五代雄介の誕生日を入れて再び同じ動作をした。するとオフロード車特有の

音がしていつでも走れるようになつた。俺はホッと息をつきエンジンを霖之助に礼を言った

「霖之助サン！ありがとうございます！」と言つと霖之助は「ああ気にしなくていいよ」と言つた。

俺はアクセルをかけてそのままG・トレーラーを出た。

「やつぱり乗りやすいな、このバイクは・・・。」俺は呟いた。程よい加速に良くかかるブレーキ、

そのままケータイを取り出した、そしてデータから地図を出した。

「えーっと・・・」のまま真っ直ぐか・・・。」「

受験生移動中

そろそろ竹が見えてきた。
周りを見回した。俺はバイクを止めて、

多分お結束のよこに迷ったのである。方向感覚力（あこたモハ）ではないが・・・）狂っている気がした。

「作にため息を付いて月を見たるのをやめやめ」と、少しだけ笑つた。

れ
た。

そこは人影が居たからだ。そのシルエットには、東方好きな俺にはすぐに、認識できた。

のほうが大きかつた。

よ、やぐの東方女性キャラ！しかも俺の好みランキンケにも上位に入るキャラだっ！だが紳士な俺はいきなり

しかけるさ！・・・多分。

「作に立當心を付てがちに、
てしるせんごの處にしきや。」
つたはずだが少しおかしかつたか?

「誰だお前は、まさか・・・お前も敵か！」といったので、俺は、すると妹紅は振り向いて驚いたように叫んだ、

いや俺以外の人も言うであらう。

「ハア！？」と

「輝夜の追つ手だなっ！これ以上慧音や里の人々に迷惑はかけさせない！」

「いやっ、おれは違ひぞつ！おれは・・・」

「とぼけるなっ！お前を倒すのは今の私しかできない！」
なうんか切羽詰つた状況だよなうつて！俺なんだよ！言われているのは！

すると妹紅はサツと何かを出した、俺はソレがすぐ分かつた

「それは・・・『ギャレンバツクル』じゃないか！」「俺の言葉を無視して妹紅はバツクルにカテ『ゴリーAの

『スタッグビートルアンデット』のカードを入れて腰に着けた、そして右手を力強く胸に当て、叫んだ

「変身！」

ターン アップ 機械音とともに田の前に光る幕の様な物が出てきた。ソレは妹紅に接近していく。

そして妹紅の身体を通り抜けたと思うと、妹紅は仮面ライダーギヤレンへの変身を成功させていた。

「・・・やつべ！」俺は慌てて腹部の中心に手かざす。すると輝きとともに「アーフル」が出現した。それと同時に甲を下にした右拳を腰の横に構えた後に左腕を下ろしつつ左の拳で右拳を包むようにし押し下げ叫ぶ

「変身！」

と叫ぶ、掛け声とともに俺の身体は徐々にクウガとなり、そして完全にクウガと変身できた。

しかしそう俺のクウガは「グローリングフォーム」だ。仮面ライダーギヤレンにも勝てないし、

ましてや中は妹紅なのだから俺に勝ち目はほとんどない。だが時

間を稼いで、誤解が解ければ万々歳だ。

「まつてくれ！妹紅サン！」俺は必死に訴えかけた。まあ自分の命が関わる事だ、必死にならない方が可笑しいぞ。

「うるさい！」妹紅は一喝して俺の問いかけを拒否した。まあ駄目だこりや、話なんぞ聞いてくれない、

妹紅はギャレンラウザー（銃のようなもの）を俺に撃つてきた。まあクウガだし死にはしないと思うが、多少は痛い・・・気がする。

「うおおおおお！」氣をとらされている隙に妹紅は走りながらラウザーを乱射してきた

「いたたたつ！」さすがにまともに食らひつと痛い！俺は苦し紛れに右ストレートを繰り出した！がしかし、

俺の拳は空を切った。妹紅は空中にジャンプしてまたラウザーを乱射してきた。カウンターの形になつて、俺は背中から銃撃に当たつた事になる。このままではやられる！俺はそう思つて一つの作戦に出た。着地した妹紅に後ろから

羽交い絞めをした。妹紅は見事に羽交い絞めにかかつた。そのままの状態で俺は妹紅に話しかけた

「何で俺を狙つたんですかっ！」すると妹紅は「お前も輝夜の一味だろうつ！」続けて「輝夜も『変身』をしたからな！」

え？何だつて？「どんな形でしたか？」俺は羽交い絞めは緩めずに言つた。すると妹紅は「丸に線が一本だつたよ！」

と言つた。続けて「お前は輝夜の一味じゃないのか？」と言つた。俺は羽交い絞めを解いて言つた

「わつきから言つてるじゃないですか・・・。」といつた。

お互い変身は解かずには話した。これまでのお互いの行動、そして俺が輝夜の一味でないことを、

* *

そして今永遠亭周辺で輝夜がハバをきかしている事を。「大変ですね・・・」俺は在り来たりだがそんな事しか言えなかつた。

予想以上に酷い状況に。「アナタもね・・・」妹紅は共感を持つように言つた。俺が幻想入りしたことも、

『アーノル』を着けなければ死んでいたことも。お互にため息をはきそうだつたがそのため息は

1人のライダーの乱入によつて飲み込まれた。

仮面ライダー サイガ・・・「天」の名前を欲しままにするライダー・・・。

それが俺たちの前に立つていた。燃える竹藪を背景にして・・・。

俺は言つた「お前は・・・お前は何者だ!!」

to be continue . . .

紅蓮（後書き）

次回予告！

どうもクウガです。理由があつて今は名前が出せません。まあ今回
の永遠亭騒動が収まればいえるかな？
んじやまた会いましょう！

これって次回予告か？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8223y/>

東方英雄伝

2011年11月24日15時47分発行